

消費行動—世代による相違について—

熊本大教育

奥村美代子

岩下紀子

○宮瀬美津子

袖木美保

目的 急速な科学技術の進展に伴って、わが国の消費財は、その加工度を高め、複雑な様相を示しはじめている。その上、消費財の過剰生産と情報の氾濫とによって、これらの物財の実質をさらに見定めにくいものにしてきている。生活の質を確保するために、わたくしどもの日常生活のなかで、このように変化しつつある「もの」といかに主体的に関与してきているか、この関与のしかたの背景にそれぞれの世代の生育した社会の雰囲気をもたらした影響が認められるのではないかと考えられる。多様な消費行動を方向づけるためには、このような視点からみることも重要であると思われる。

方法 熊本市及びその近郊に在住する成人・学生・児童生徒の合計3000名を対象に1986年から1988年にわたって、質問紙と面接による調査を行った。調査結果は、FM16ベータを用いて統計処理を行った。

結果 生活環境問題としての物財消費についての認識はありながら、世代によって、実際の消費行動はその認識と解離している状況が認められた。また、物財に対する価値意識の変動が消費行動の変動に反映することも認められた。さらに、「一次的な価値」だけを重視する行動傾向と、「二次的な価値」も重視する行動傾向とが、世代によって異なる現われを示していた。